

パリ世紀末ベル・エポックに咲いた華 サラ・ベルナールの世界展

渋谷区立松濤美術館 2019. 12. 07～2020. 01. 31

「サラ・ベルナール」(1844～1923)は、フランスの「ベル・エポック」と呼ばれた時代を象徴する大女優として知られ、19世紀後半～20世紀初頭にかけて活躍した。彼女は、パリで女優として成功を収めた後は、アメリカやフランス国外にも活躍の場を広げ、自らの一座を立ち上げ劇場経営にも携わった他、芸術家として彫刻作品の制作を行うなど生涯にわたり幅広い活動を続けた。

アルフォンス・ミュシャ 《サラ・ベルナール(部分)》1896年 リトグラフ



百合のティアラを飾る「遠国の姫君」のメリザンド役の「サラ・ベルナール」を描いたポスターは二つの目的で作られたものである。一つは「ラ・プリュム誌」「サラ・ベルナール」の記事宣伝用で、もう一つは「サラ・ベルナールを讃える会」(1886年)である。

豪華な百合のティアラも「遠国の姫君」の扮装のままに描いているのは、記事のタイトル故とされる。

このポスターは、日本の雑誌「明星」第6号(明治33年)の与謝野晶子の短歌の挿絵として最初に使用されて、その後も雑誌に繰り返し掲載がされている。

アルフォンス・ミュシャ 《ロレンザッチオ》1896年 リトグラフ



「ハムレット」と同じように、「サラ・ベルナール」が男役を演じた芝居はいくつかあり、メディチ家の「ロレンザッチオ」を主人公にした芝居もそのひとつである。

このポスターでは、「ロレンザッチオ」が書物を持ち、右手を口元に当てて思想にふけるポーズをとり、思慮深い人物として描かれている。画面左上の6つの赤い球がついたメディチ家の紋章に襲いかかろうとしている龍は、「アレックスandro」の暴政を象徴し、下部枠内には豪華な剣に貫かれた男性が描かれている。これは「アレックスandro」に他ならず、今まさに「ロレンザッチオ」の頭の中に浮かんでいる光景なのである。このポスターでは「ミュシャ」は剣を唯一の頼りとばかりに胸に抱えて立つ「ハムレット」を表現している。